昭和大学大学院秋季入学式

平成30年度昭和大学大学院秋季入学式が10月4日、旗の台キャンパス16号館で挙行された。

今年度は医学研究科8名、薬学研究科4名、保健医療学研究科の博士前期課程13名、博士後期課程5名が入学した。

式典では小出良平学長の告辞に始まり、小口勝司理事長の祝辞、小風暁医学研究科長、野部浩司薬学研究科長、三村洋美保健医療学研究科長のあいさつがあった。

その後、新入生および大学関係者一同による昭和大学宣言と校歌斉唱をして、閉式となった。

各研究科長のあいさつ（抜粋）は以下のとおり。

小風暁医学研究科長

「学位を取得するためにはモチベーションを高め維持する必要があります。ある研究で、『モチベーションを最も高めるのは有意義な仕事の進捗を着実に図ることである』という結果が出ています。皆さんはそれぞれのマイルストーンを適切に設定し、ゴールにむかって日々着実に歩みを進めていってください」

野部浩司薬学研究科長

「皆さんは多くが社会人としてすでにさまざまな医療現場でご活躍されていると聞いています。学部を出てすぐに大学院へ入学された方より現場のことを経験した皆さんの方が一つアドバンスを持っており、仕事で直面する問題が研究テーマになるかもしれません。私たち教員もサポートをしますので学位取得にむけて頑張ってください」

三村保健医療学研究科長

「今年度のノーベル生理学・医学賞を受賞した本庶佑博士や過去のノーベル賞受賞者も受賞コメントで『好奇心』というキーワードを使っていました。科学研究の成果は研究者の好奇心が出発点なのかもしれません。皆さんも好奇心を大いに持って研究していただけることを期待しています」

創薬・医療薬理シンポジウム
薬学部の山口智亮さんが受賞

8月25日、九州大学病院キャンパスで開催された「次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム2018」において、薬理学部門配属の山口智亮さん（薬学部5年）が優秀ポスター発表賞を受賞した。

同シンポジウムは、日本薬学会薬理系薬学部会が中心となり、薬理系領域に関わる若手研究者、大学院生、学部生が最新の研究成果の発表する場となっている。

山口さんは長期実務実習中の学部学生という多忙な立場での受賞となり、指導を行ってきた教員、薬理学部門で研究を行っている配属生に大きな喜びと刺激を与えた。

演題名「2型糖尿病腎症モデルマウスにおけるDimethyl Resveratrolの腎症改善効果に関する研究」

山口智亮さんのコメント

今回私は、糖尿病腎症の治療薬として有用な化合物の探索を目的に研究を行い、優秀ポスター発表賞を頂きました。

糖尿病腎症は慢性腎不全に進展しやすい危険な疾患にも関わらず、現在進展を抑制する有効な治療薬が無く、新規治療薬の開発が急がれています。本研究で使用した化合物は糖尿病腎症の治療薬として有効であると示唆され、新規治療薬の開発の第一歩となりました。

本シンポジウムでは、薬理学的観点から医療を進めていこうと真剣に研究に取り組んでいる学生が多く、普段の学生生活では味わえない刺激を受け、今後も一人でも多くの方のために新薬の研究を続けていきたいと改めて感じました。

最後になりますが、研究を進めるに当たってお世話になりました薬理学研究室の皆さまに感謝を申し上げると共に、今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

日本オリンピック委員会から感謝状が贈呈

9月4日、公益財団法人日本オリンピック委員会（JOC）の星野一朗理事から小口勝司理事長へ感謝状が贈呈された。

これは昭和大学がJOCのトップアスリート就職支援ナビゲーション「アスナビ」を利用し、これまでに女子アイスホッケー選手の獅子内美帆、藤本もえこ、浮田留衣の3人を職員として採用して、彼女らの強化活動を支援し国際競技力の向上に努めたことによるもの。

（左）学校法人昭和大学　小口勝司理事長
（右）公益財団法人日本オリンピック委員会
星野一朗理事

3人は2018年平昌冬季五輪で日本代表としてホッケーリンクに立ち、日本アイスホッケー女子の五輪初勝利に貢献した。昭和大学は飯塚祐司新監督（昭和大学職員）のもと、2022年北京冬季五輪で更なる活躍ができるようにより一層の支援をしていく。

昭和大学大学院秋季修了式

平成30年度昭和大学大学院秋季修了式が9月27日、旗の台キャンパス16号館で挙行された。

医学研究科15名、歯学研究科1名、薬学研究科1名、保健医療学研究科の博士前期課程9名に小出良平学長から学位記が授与された。

小出学長は告辞で「今後は、教室・学部・大学の指導的な立場として一層の研鑽を積みながら、研究活動を継続されることを期待しています」と述べた。

医学部白衣授与式を挙行

平成30年度医学部白衣授与式が9月27日、上條講堂で挙行された。

この式は臨床実習開始にあたり実習生として倫理観や患者さんに対する思いやりの心を再認識して、医師を目指す者としての心構えを新たにする目的で開催されている。

式の冒頭、告辞に立った小川良雄医学部長は「10月からの臨床実習では、敬虔な気持ちを持って患者さんと接し、至誠一貫を体現するスチューデント・ドクターになってほしい」と述べた。

その後、4年生122人は教員から授与された真新しい白衣に袖を通し、初期臨床研修医代表から、実習における諸注意などの説明を受けた。

傷の治癒に関する論文が米国学術誌に掲載
― 毛細血管が皮膚の修復をコントロールする ―

昭和大学医学部生化学講座の宮崎拓郎講師、宮崎章教授を中心とする研究グループの傷の治癒に関する論文が米国実験生物学会連合学術誌『The FASEB Journal』オンライン版に掲載された。

この論文はこれまで酸素・栄養素の輸送、ならびに免疫細胞の運搬が主な機能と位置づけられてきた皮膚の創傷治癒の過程で形成される毛細血管網（新生血管）が、積極的に創傷治癒に参加することを明らかにしたもの。

本研究成果は難治性潰瘍の治療や瘢痕形成の予防に応用できる可能性がある。

邦題：「血管内皮カルパインシステムは創傷治癒における筋線維芽細胞の分化を主導する」

宮崎拓郎講師のコメント

私たちの研究グループでは、細胞内のタンパク質代謝が血管機能や生活習慣病におよぼす影響を解明すべく、検討を行っています。The FASEB journalは、1912年に設立され30の学会が加盟する米国実験生物学連合の機関誌で、このような場で昭和大学発の研究成果を発表できたことを大変喜んでいます。研究はまだ途上ですが、基礎研究を通して今後も益々昭和大学を盛り上げていくよう精進して参りますので、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

日本磁気共鳴医学会大会で大会長賞を受賞

第46回日本磁気共鳴医学会大会（金沢：9月7日～9日）において、政岡ゆり准教授（医学部生理学講座・生体調節機能学部門）が、『Association between odor memory and prefrontal cortex; an fMRI study（香りによる記憶想起と前頭前野）』の研究で、545演題の中から大会長賞を受賞した。

本研究は、MRIスキャナー内で自身が開発した高耐磁性嗅覚刺激装置による介入操作を行い、脳活動を視覚化するfMRIの技術を用いて、嗅覚と高次脳機能のつながりを解明したもの。香りが引き起こす自伝的記憶が意思決定などを担う眼窩前頭葉を強く賦活させ、空間的記憶、エピソード記憶などに関わる領域との接続性を高めるという連動メカニズムを明らかにした。本研究成果は、記憶に連結した香り刺激が認知機能の低下予防を目的とした研究に応用されることが期待される。

政岡ゆり准教授のコメント

本研究では多くの共同研究者の方々のご指導とご協力を賜りましたことを心よりお礼申し上げます。視覚や聴覚と比較し、ヒトにおける嗅覚の脳研究は少ないのが現状です。今後も嗅覚と高次脳機能のつながりを解明し、そして香りをつかって健康に年を重ねていけるヒントを多くの方に提供していけたらと思っております。今後もご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

薬学部卒業式・学位伝達式

平成30年度昭和大学薬学部卒業式・学位伝達式が9月27日、旗の台キャンパス16号館で挙行され、小出良平学長から卒業生16名に学位記が授与された。

中村明弘薬学部長はあいさつで「皆さんは昭和大学で、これからの時代に必須となるチーム医療を実践する力と知識を身につけました。今後それぞれの進路において、それらを発揮し活躍することを期待します」と述べた。